

## 発刊の辞

心理学の学部教育では、学生自らが先行研究をもとに実験・調査を計画し、実際にデータを集め、統計的解析を行ったうえでレポートを執筆したり研究成果を発表したりする——つまり、卒業研究に向けて研究の流れをひと通り経験する——といった授業を行うことが一般的である。これらの研究は、自らの企画による研究をはじめて行う学部生によるものであり、限られた時間の制約の中で完成させる必要もあることから、準備不足や理論面・手続き面の粗が目立ったり、勢い先行研究を追試するのみで終わることも少なくない。

しかし、これらもまた真摯な科学研究の一端であることには違いない。昨今では心理学研究の再現性の問題が多く雑誌や学会企画でも取り上げられている。学生が授業の一環として行った研究であるという留保がつくとしても、これらの研究成果には、過去の研究を追試し、その再現性や一般性を明らかにするという点において一定の価値があるだろう。そのように考え、これらの研究成果をより多くの人々の目に触れる形にすべく本報告書を編んだ次第である。

授業では、学生は3～4名のグループに分かれてそれぞれテーマを選び、先行研究の講読を経て疑問点や各自の関心に基づいて追試的、拡張的な研究を行った。したがって、本報告書全体のテーマに特に統一性はない。当初から成果報告をウェブ上で公開することを念頭に置いていたが、このことには一定の教育上の効果もあったと考えている。レポート執筆についての学生同士の話し合いの中で「どうせ先生しか読まないから」との声が挙がった際にそうでないということを具体的に提示できたからである。学生にとっても評価の“ためにする”レポートにはあまり身が入らないものだというのを改めて実感した。

学生には、ゼミの後輩が読むであろうことを想定して、通常の研究報告にはあまり書かれないであろう詳細や反省点などについてもあえて書くよう求めたところもある。その他、研究報告として十分でないところ、議論の整合性を欠くところなどもあるかもしれない。それらはすべて担当教員である編者の責任である。読者の方々の忌憚ないご意見、ご感想などをいただければ幸いである。

2017年2月24日

大正大学心理社会学部人間科学科

井関龍太

r\_iseki@mail.tais.ac.jp